

持川遺跡とその周辺

——和賀川流域の「神子柴・長者久保文化」の石器群——

熊谷 常正

1. はじめに

北上市滑田（なめしだ）の持川遺跡から出土した7点の打製石器は、岩手県内のいわゆる「神子柴型石斧」を代表する資料としてつとに知られている。近年、県内でも旧石器時代終末から縄文草創期の資料が確実に増加しつつあるが、この持川遺跡の石器群に類似した資料は残念ながら良好な出土例に恵まれない。また、爪形文土器を出土した盛岡市大館町遺跡群の大新町遺跡、滝沢村室小路15遺跡、あるいはそれらに後続するであろう平底無文土器の段階にもその確実な系譜はたどれない。

本文は、発見から半世紀近く経過した持川遺跡の石器群を改めて記載し、あわせて和賀川流域の関連資料との比較から、この特異な石器群の位置づけを再考するものである。

2. 持川遺跡出土資料をめぐる経緯

持川遺跡出土の石器群を最初に記載したのは、故鈴木孝志氏である。鈴木氏は1968年、『北上市史』第一巻で「北上川中流域の無土器文化」と題して和賀仙人遺跡など北上市周辺から宮城県境に至る17遺跡を紹介し、この持川遺跡の石器群について触れた（鈴木1968）。

鈴木氏によれば、持川遺跡は、北上川支流和賀川の北岸に広がる低位段丘である金ヶ崎段丘上に位置し、「水田の改良工事中に珪質頁岩製の大型打製石斧七点が若干の剥片を伴って、積み重なる状態で一ヶ所から発見された」という。続けて、これら「七点が非常に斉一性を持っている」こと、「すべて打製であり、両側面から中心線に向かって薄く幅広い剝離により全体を整形

し、特に刃部の片面において刃先より基部に向って一〜三回の打撃によって細長い剝離を行ない、片刃の傾向をみせ、丸鑿状を呈する」ことや「全体に肉薄」で、「基部が三角形に尖るものがほとんどである点」などを指摘した。

そして製作技術の特徴から「わが国の無土器文化最終末期の一つと考えられている長野県神子柴、北海道モサンル、青森県長者久保の石斧に近似している」と、編年的位置も想定するが、その一方で「神子柴に代表される石斧は長野県に多く発見されているが、ほとんどが肉厚で、しかも局部磨製のものが多く、青森県長者久保の場合も同様である。これに対して本遺跡の石斧はあまりにも特徴的である。そして北上川中流域において断片的に発見されているものはすべて打製で、持川のものに近い形態をとるものがほとんどである。これらの点を考えると、持川の石斧は神子柴、長者久保等との時間的差も考え得るが、他方、この形態上の特色は地域的なものとの想定も可能であろう」との所見を示された。

さらに鈴木氏は、その出土状態にも注目し、墓地あるいはデポに関わる「特殊な遺跡」として考えねばならないとも述べている。

このような鈴木氏の的確な観察・指摘は今でも色あせない。彼は北上川中流域を主とした旧石器資料の更なる集成を計画するが、その研究途上の1970年、38歳で病没する。この持川遺跡の石器群は、鈴木氏によって実測され、病床にあった氏から依頼を受けた鎌田俊昭氏によってトレース・図化され、鎌田氏によって製作工程を中心に1971年連名で発表された（鈴木・鎌田1971）。やがて、この実測図が、その後の諸氏による研究に利用されていく。

この論文には、持川遺跡の出土資料7点中6点の実測図が掲載されていたが、北上市和賀町夏油温泉遺跡資料、鈴木氏が生前に実測していた一関市萩荘山田遺跡の石器なども含まれていたため混乱が生じることになった。特に、山田遺跡の石器は形状が持川に類似するためか以後の関連論文には持川遺跡出土資料として、また、持川遺跡資料の一部が夏油温泉遺跡出土資料として紹介されることがしばしばあったことを指摘しておく。

今回、改めて北上市江釣子史跡センター及び北上市立博物館に収蔵展示されている持川遺跡資料にあたり提示するものである。

3. 持川遺跡の位置と発見状況

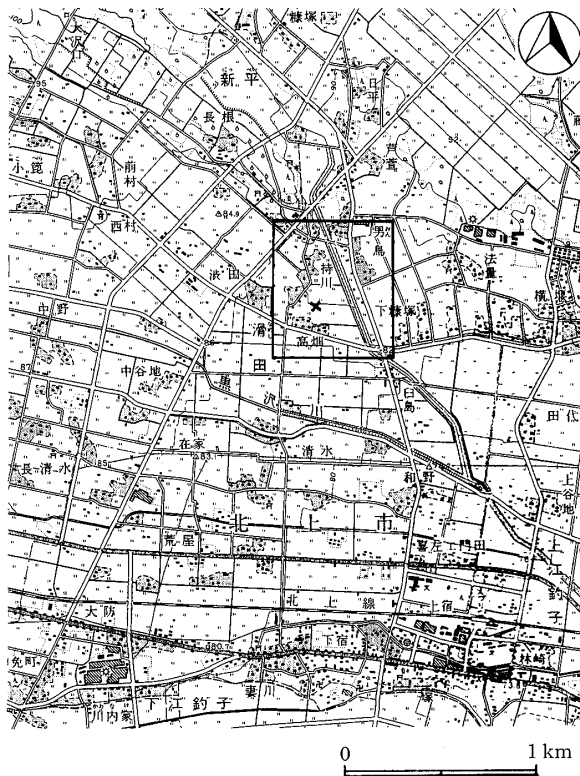
持川遺跡は、東北自動車道北上・江釣子インターの北西、約2.7 kmに位置する(第1図)。ここは北上川の支流、和賀川の北岸に発達する低位段丘の金ヶ崎段丘面にあたる。花巻市南笹間地区から南東に張り出した中位段丘である村崎

野段丘面の先端から400 mほど南東、東西に流れる長根堰に南接する平坦な水田が出土地点である。この部分の標高は約83 mと思われる。

持川遺跡のある滑田地区は、藩政時代から新田開発などが活発に行われ地形改変を幾度か受けてきた。昭和29年(1954)、当時の江釣子村総合計画第一次区画整理事業がこの地区で実施され、翌年に完成した。石器はこの事業の一環として行われた水田改良工事の際に出土したものである。

幸い、発見者である小原多吉・リス夫妻から、直接その当時の状況について教示いただくことができた。それによれば、改良工事以前にもここは水田だったが、それまで利用していた持川堰という新平川上流から引いていた南北に走る水路を改修するため水田面を掘削したところ石器が出土したという(第2図)。

石器は、水田床土の下位、それほど深くないところに砂層があり、その中に長軸を揃えるように積み重なった状態で出土した。砂層の下には砂と粘土の互層があり、さらにその下位に



第1図 持川遺跡位置図 (×印)



第2図 持川遺跡石器出土地点 (×印の箇所)

ライ化した青灰色粘土が見られた。出土地点の東側、新平川方向には黒褐色の土層が厚く堆積し、砂層の分布は出土地点の周辺に限られ、礫はほとんど確認できなかったという。石器出土地点付近には炭化した樹木もあった。

小原氏によって採集されたのは7点の石器だけだが、その周りには小さく薄い剥片がいくつか散布していたのを記憶しているとのことであった。なお、その後の耕作で石器などは発見されていない。

前述の中位段丘面は、標高90~95m、古代駅家跡として県史跡に指定されている新平遺跡の所在する段丘である。ここからは縄文中期の土器のほか、大形の尖頭器なども採集されている。また、東方の中位段丘面には、鳩岡崎遺跡や藤沢遺跡群が位置し、縄文時代・古代の集落のほ

かナイフ形石器なども出土している。

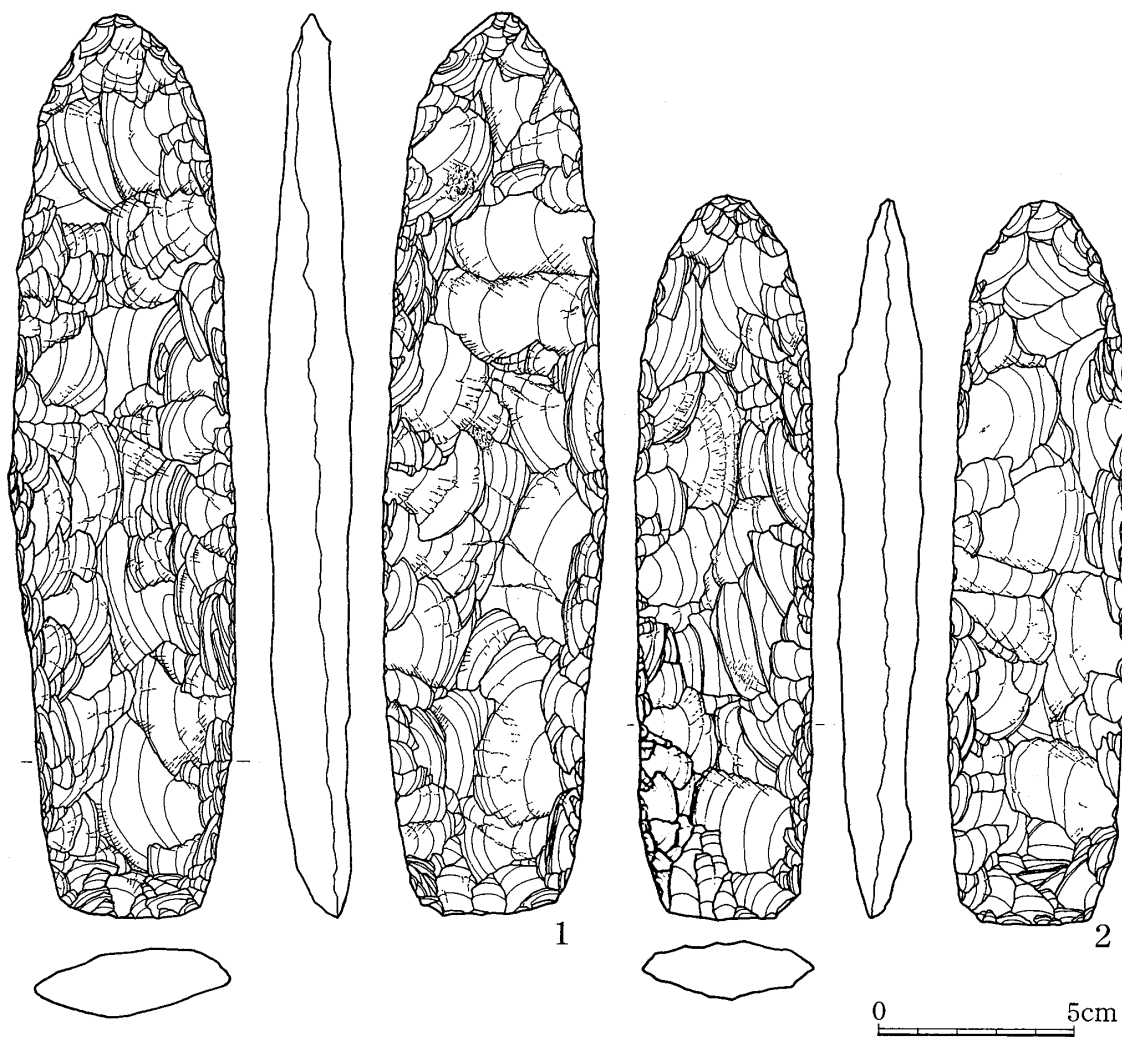
小原氏は、この石器を保管していたが、昭和39年(1964)3月、江釣子村五条丸古墳群出土品収蔵庫が竣工した際に、寄贈されている。鈴木氏は、それを見学して実測図を作成したと考えられる。

4. 持川遺跡出土石器

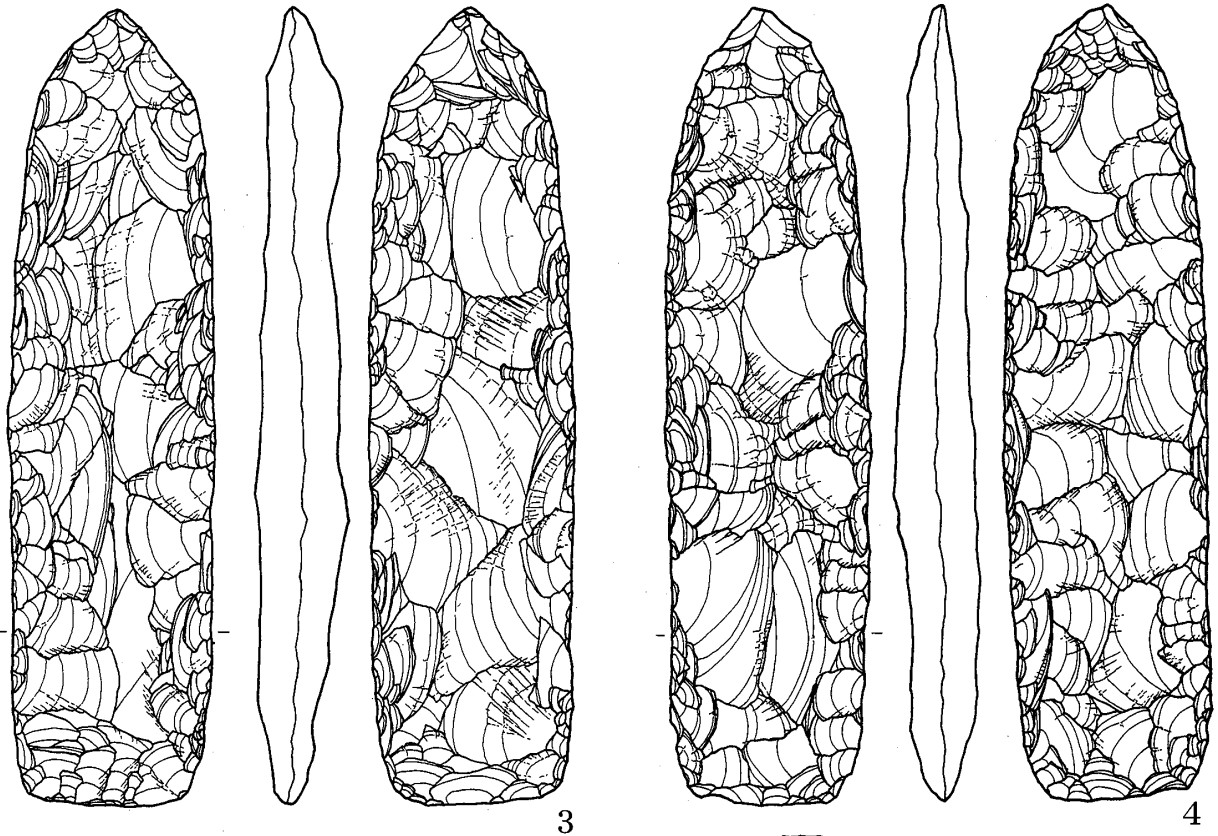
持川遺跡の7点の石器は、鈴木氏の紹介以後も、多くの論文で「打製石斧」として扱われてきた。今回の再記載にあたっては、便宜的に「石斧」として部位を呼称する(第3~5図)。

【資料1】

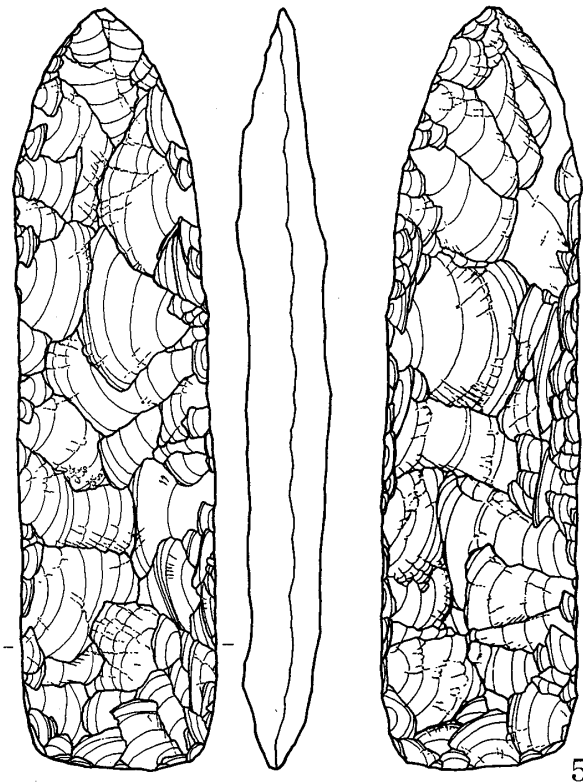
7点の石器中、最大の資料。長さ23.0cm、幅



第3図 持川遺跡出土資料(1)



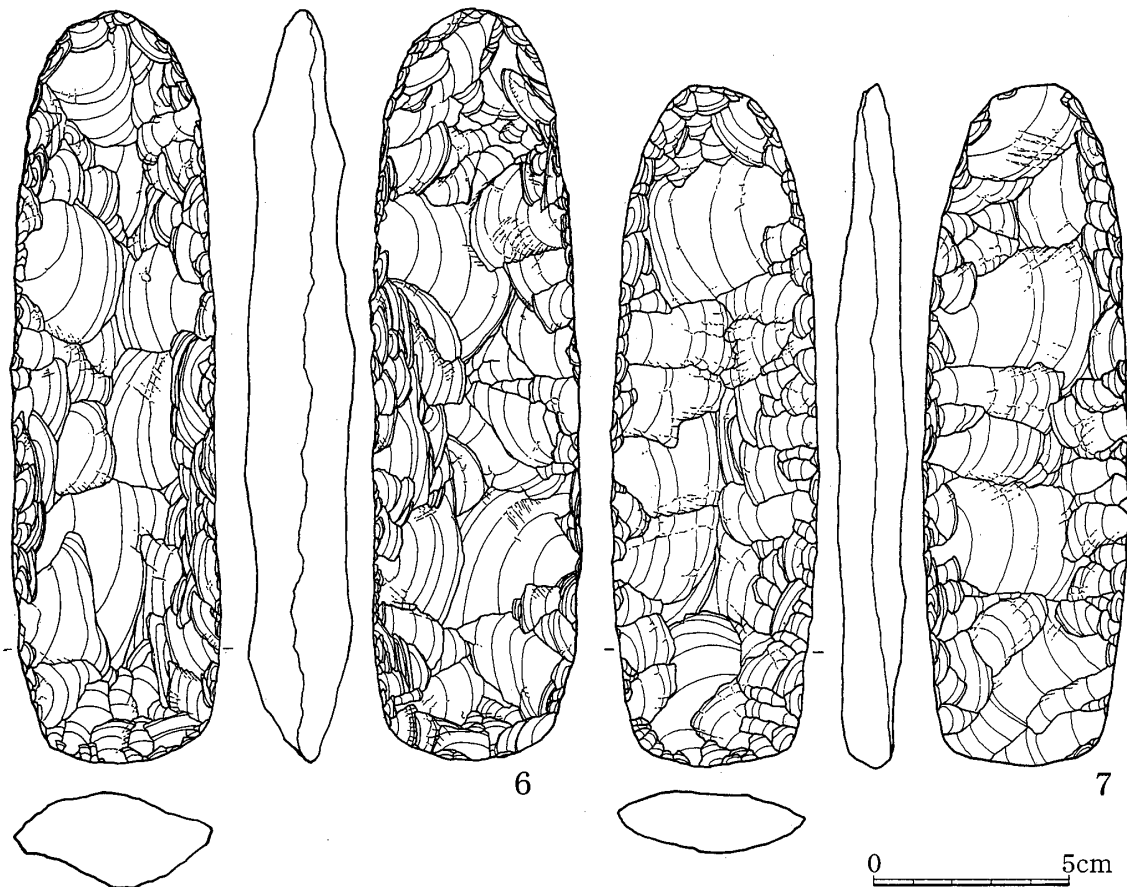
第4図 持川遺跡出土資料(2)



0 5cm

5.7 cm, 厚さ 2.3 cm, 重量 315 g を計る。幾分砂質の強い灰白色の硬質頁岩で、不純物もみられる。両面とも左右両縁から幅広い剥離作業を行い、その剥離面が中軸線を越えるものもある。さらにその後幅矯正を意図した調整が行われるが、階段状の剥離面をとることが多い。

身部中央に最大幅があり、やや突出した印象を受けるが、幅矯正剥離などから特に意識したものとは思えない。刃部はそこから幅を減じ、側縁と刃先からの剥離によって端部は角張り、刃の平面形は直線状になる。断面は片刃状を呈するが極端ではない。基部は両側縁からの調整で圭頭状に作られる。また、身部中央断面はレンズ状をとる。明瞭ではないが裏面に節理的な面が僅かに観察できるほか、裏面基部左端に僅かに礫面を残す。



第5図 持川遺跡出土資料(3)

【資料2】

長さ18.5 cm, 幅4.6 cm, 厚さ2.2 cm, 重量202 gを計る。硬質頁岩。やはり幅広い剝離によって成形の剝離を行った後, 両側縁がほぼ平行するほど入念に幅矯正の剝離作業をする。ただ裏面にはそれが少ない。刃部は刃先からの剝離によって仕上げられ, 直刃となる。刃部断面は両刃状である。基部は圭頭状を呈するがやや丸味が強い。周縁に微細な調整剝離が巡る。

【資料3】

長さ18.4 cm, 幅4.8 cm, 厚さ2.0 cm, 重量198 gを計る。硬質頁岩。中軸線を越す幅広の剝離が両側縁から両面に行われる。おそらく素材の厚さを減じることを目的としたのだろう。正面下位に素材面と思われる剝離面があるが判然としない。その後, 両側縁が平行するまで幅矯正が行われ, さらに微細な調整が周縁に施される。刃部も両面へ刃先方向からの剝離によって

整形される。基部は圭頭状に尖る。

【資料4】

長さ18.3 cm, 幅4.3 cm, 厚さ1.9 cm, 重量176 gを計る。砂質の硬質頁岩。幅広の成形剝離, その後の幅矯正剝離などは他の資料と共通する。ただ, 刃部の刃先方向からの剝離は, それほど深く入っていない。これに対し, 圭頭状の基部には特に裏面に先端方向からの剝離が繰り返され, 入念な整形が行われている。

【資料5】

長さ17.5 cm, 幅4.6 cm, 厚さ2.1 cm, 重量162 g。砂質の硬質頁岩。やはり幅広の剝離作業によって成形するが, 裏面上部には素材面あるいは節理面と思われる部分が見られる。刃部両面とも刃先方向からの剝離が成される。基部は圭頭状を呈する。

【資料6】

長さ 19.2 cm, 幅 5.3 cm, 厚さ 2.6 cm, 重量 301 g。光沢を帯びた珪質頁岩, 珪藻微化石も観察できる。中軸線を越えた幅広の剥離の後, 側縁矯正の剥離が行われるが, 剥離末端にヒンジが強く階段状を呈するものが多い。刃部は丸味を帯び, 正面には刃先方向からの剥離が繰り返される。刃部断面は片刃状で, 全体の厚さも他の資料に比べ厚く, 横断面はやや膨らむいびつなレンズ状となる。基部は丸味を帯びる。やはり周縁全体に微細な調整が巡る。

【資料7】

長さ 17.4 cm, 幅 5.3 cm, 厚さ 1.8 cm, 重量 173 g。砂質の硬質頁岩。側面がねじれたような形をとる。両面への幅広の成形剥離, 幅矯正の剥離が行われるのは他の資料と共通するが, 正面の刃部は刃先方向からの深い剥離の後, 側縁から幅調整し, 小剥離によって整形する。一方裏面は側縁からの成形剥離だけで明瞭な調整剥離は観察できない。断面は片刃状を呈する。基部は, やはり片面だけ調整され, 資料6同様丸味を帯びる。

以上の石器群を概括する。

石材は, 珪質頁岩の資料6以外は, やや砂質の強い硬質頁岩で, 灰白色の色合いも類似する。特に資料4・5は同一母岩の可能性が高い。6の石材は光沢を持つほど良質で茶色味を帯び, 持川遺跡の他の石器や和賀川流域の旧石器時代や縄文時代の遺跡で多数出土する灰白色の頁岩類とも全く異なる。

また, 表面には薄く暗茶褐色の筋が不規則に走っているのがいずれの資料にも観察できる。これは埋没時に高師小僧などの褐鉄鉱が付着したものの痕跡と考えられ, 湿地的環境での埋蔵状態を窺わせる。

全体に薄手であることなどから, 剥片素材が利用されていると考えられる。特に資料7の側面のねじれは, 剥片の形状を示している。ただ主要剥離面は残らず, 具体的な剥片形状は不詳である。

製作工程は, 素材の厚みを減じながら平坦な剥離を行う成形段階, 幅を矯正し両側縁を対称(平行的に整形する段階, それに周縁部に微細な調整を施す段階という三段階に大まかに区分できる。特徴的な刃部先端からの剥離, 基部を圭頭状に作り出す工程は整形段階あるいはそれに続けて行われるようだ。

形状は基部形態により圭頭状のもの(資料1~5)と丸味を帯びるもの(資料6・7)に区分できる。前者を便宜的にA類, 後者をB類と呼称しよう。前者はさらに大形(1)とそれ以外(2~5)に分けられる。刃部断面は片刃状と表現できるもの(1・6・7)が目につくが極端ではない。むしろ基部を薄く調整する意識が成形段階から窺える。身部横断面は中央部に最大厚をもつレンズ状となる。ただし6は, 他と比較してやや厚手になる。

いずれの資料にも研磨痕は見られず, 刃部の破損も観察できない。

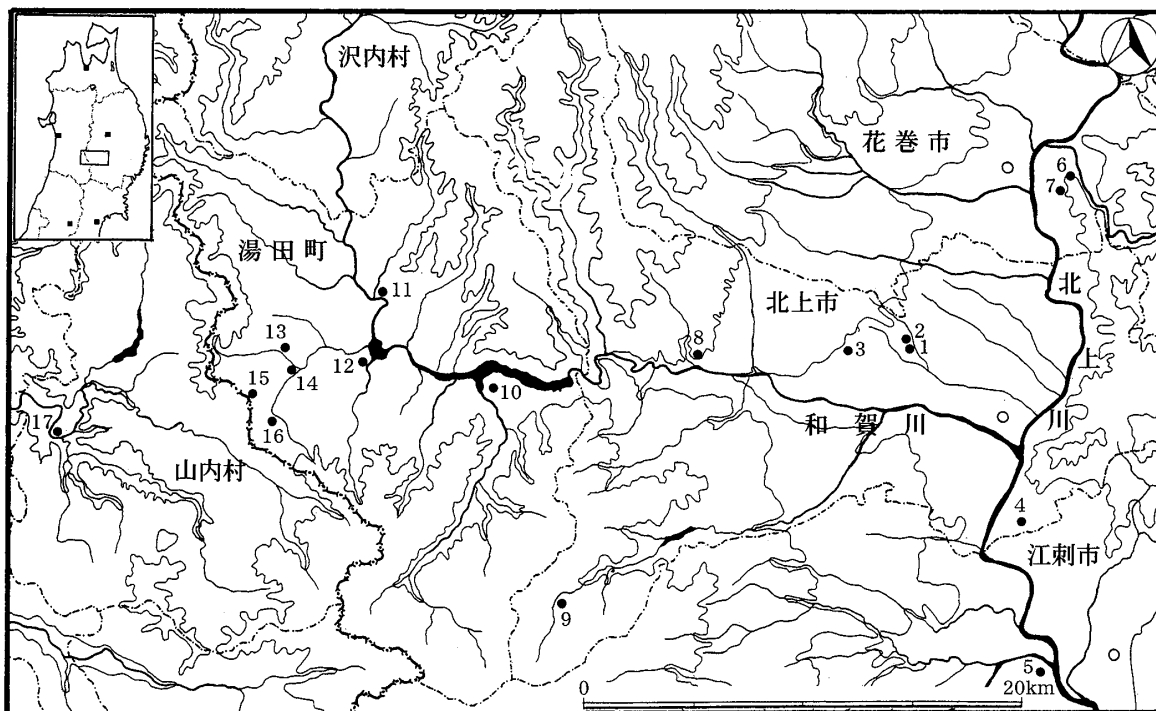
以上, 形態や製作工程の類似性, 石材の共通性, また出土状態などからこれら7点の石器は同時期の所産になるものであることは確実だろう。特に, A類とした1~5は, 同一人物による製作である可能性も十分に考えられるほど, 斉一的である。

前述の通り, 鈴木氏は持川の「石斧」を「形態上の特色は地域的なものとの想定も可能」と述べている。その地域的な様相を, 和賀川流域の関連資料のなかで辿ってみる。

5. 和賀川流域の関連資料

奥羽山脈の和賀岳に源を發した和賀川は湯田町川尻で流路を東に変え, 北上市で北上川に合流する北上川水系屈指の支流である。上流部の沢内村, 中流部の湯田町域そして下流の北上市にあたる流域でそれぞれ段丘群を發達させる。

歴史的にもこの河川は北上市と秋田県横手市を結ぶ重要な交通の要路であったし, 現在も秋田自動車道・JR北上線・国道107号が並行して走り, 考古学的には和賀仙人・大台野・大渡II遺跡など岩手県の旧石器文化研究の中核を成し



- 1: 持川(北上市) 2: 新平(北上市) 3: 稲葉Ⅰ(北上市) 4: 岩脇(北上市) 5: 胆沢城跡(水沢市)
 6: 高木(花巻市) 7: 上台Ⅰ(花巻市) 8: 愛宕山(北上市) 9: 夏油温泉(北上市) 10: 峠山牧場Ⅰ
 (湯田町) 11: 湯之沢Ⅱ(湯田町) 12: 上野々(湯田町) 13: 細内Ⅰ(湯田町) 14: 大台野(湯田町)
 15: 越中畑Ⅴ(湯田町) 16: 野々宿Ⅳ(湯田町) 17: 岩瀬(山内村)

第6図 和賀川周辺関係遺跡位置図

てきた地域として知られる。また、縄文時代の各期を通じて、剥片石器石材に頁岩が卓越し、奥羽山脈あるいはそこを越えた地域からコンスタントな石材供給が行われた地域でもある

第6図に和賀川周辺の関係遺跡、第7・8図に関連資料を示す。

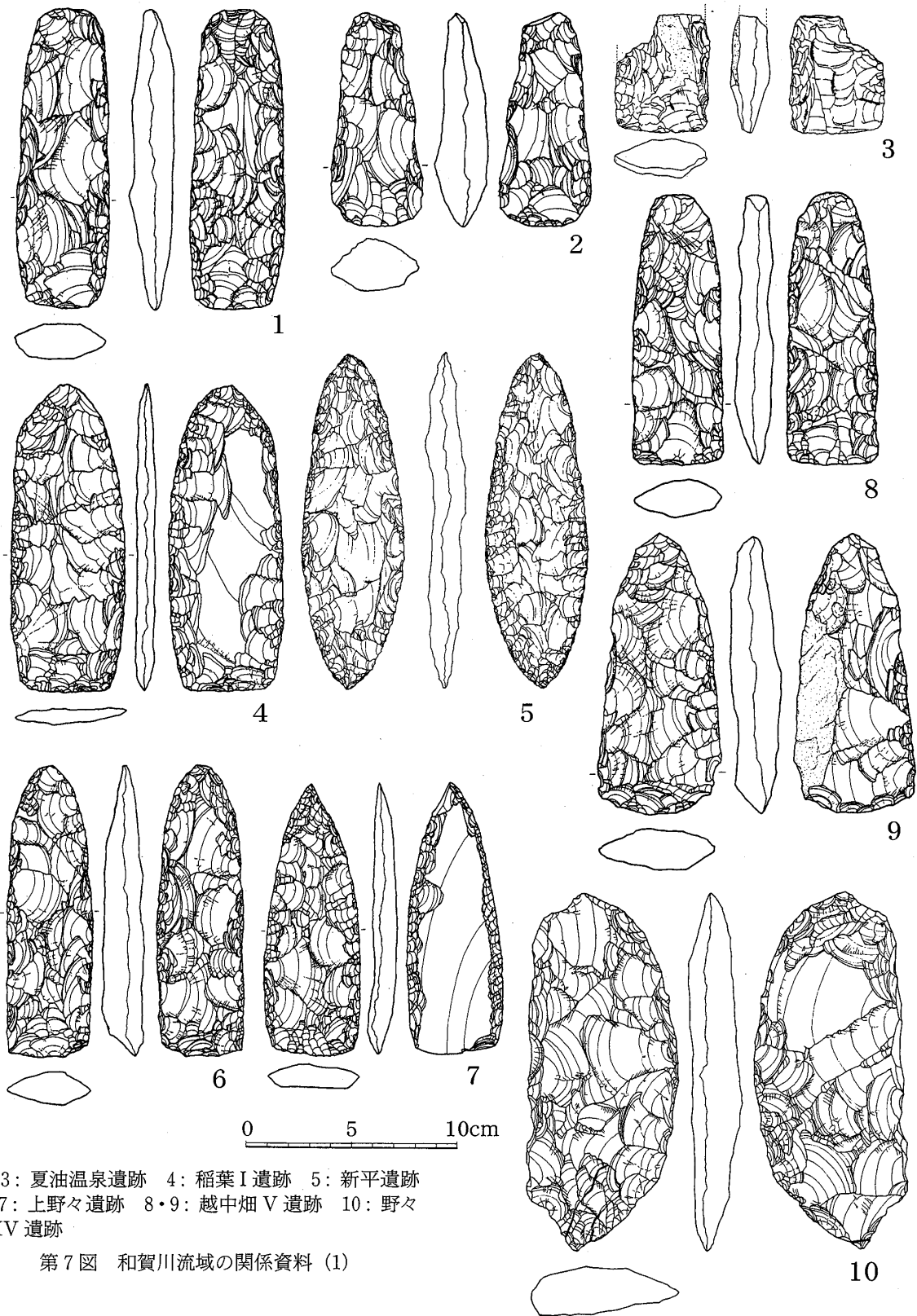
第7図1～3は和賀川支流、夏油川上流の夏油温泉地内で1965年7月、広場造成工事の際に出土した資料。夏油川より13mほどの比高差を持つ小規模な段丘面に位置する(第6図9)。

『北上市史』では打製石斧3点、押圧剥離による両面加工の細身の有舌尖頭器1点、厚手で粗い剥離の尖頭器2点、それに縦長剥片を楕円形に整形し両側縁に剥離加工を施した搔器1点、先端を欠損した押圧剥離による石鏃状の石器1点からなる8点の資料写真を掲載している。このほか縦長石匙破片、無茎の石鏃などが表面採集されたというが、土器片は確認されていない。石斧や搔器に黄褐色粘土が付着しており、出土層位を推定できる。

現在、打製石斧1点、有舌尖頭器1点、尖頭器1点の所在が不明で、残りの5点が岩崎地区公民館に収蔵されている(註1)。

1は、珪質頁岩の厚手の素材を短冊状に仕上げている。長さ14.3cm、幅4.4cm、厚さ2.1cmを計る。刃部は刃先方向と側縁からの剥離により直刃状になる。断面は比較的薄く両刃をとる。基部は刃部に比べやや丸味を帯び、周縁部に細かな調整が施される。

2は刃部方向に最大幅と厚さをもつ。珪質頁岩製。長さ10.1cm、幅4.4cm、厚さ2.5cmを計る。やや深い剥離によって成形し、その後周縁の剥離により側縁部を整える。正面では刃部の剥離から左側へ向かって剥離作業が進む。刃部は丸味を帯びる。裏面基部方向中央部には主要剥離面と思われる面が残存する。形状からは、縄文時代のいわゆる「石篋」に類似する。このような資料は、北上市愛宕山遺跡(第6図8)などでも採集・出土している(熊谷1985、佐藤ほか1993)。

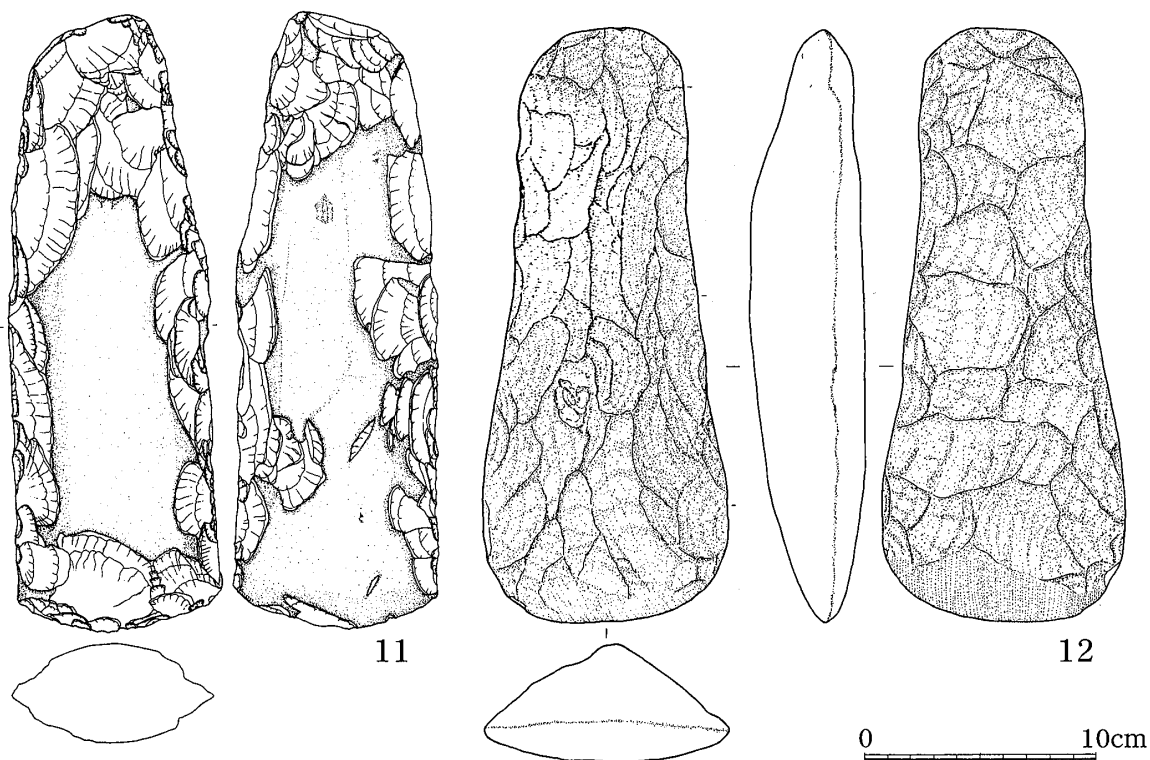


1~3: 夏油温泉遺跡 4: 稲葉I遺跡 5: 新平遺跡
6・7: 上野々遺跡 8・9: 越中畑V遺跡 10: 野々宿IV遺跡

第7図 和賀川流域の関係資料(1)

3は、現在所在不明で、鈴木・鎌田論文掲載図面を転載した。この図の表現に従えば、中央部で折れた石斧刃部の破片である。礫面を残すこ

と、正面右側縁の調整が著しいことなどが特徴である。裏面中央部に描かれた上位方向からの剝離は折損後に行われた面と思われる。



11: 峠山牧場遺跡 A 地区 12: 湯之沢 II 遺跡

第 8 図 和賀川流域の関係資料 (2)

4 は、北上市和賀町藤根稲葉 I 遺跡採集資料 (小田島ほか 1991)。『北上市史』に蓮見遺跡出土品として紹介された石器である。地元の北上平和記念展示館の収蔵資料。稲葉 I 遺跡は持川遺跡の西方約 3 km、金ヶ崎段丘高位面に位置する (第 6 図 3)。幅広で薄手の硬質頁岩の剥片を素材とし、裏面には大きく主要剥離面を残すが、パルプは除去されている。刃部は側縁・刃先方向から入念な剥離によって直刃に調整・整形される。基部は尖る。全長 14.5 cm, 幅 5.4 cm。

5 は、持川遺跡石器出土地点の北北西約 500 m にあたる北上市新平遺跡 (第 6 図 2) の採集資料 (浅田 1993)。中位段丘上の県指定史跡地より若干北側に寄った斜面からの出土品という (鈴木 1968)。長さ 15.8 cm, 幅 4.8 cm で石質は珪質頁岩、両面にわたって入念な剥離が施された木葉形の尖頭器である。本遺跡からは、この資料のほかにも大形と中形の尖頭器が採集されている。

6・7 は湯田町上野々遺跡出土資料 (鈴木 1995)。いずれも頁岩を素材とする。上野々遺跡

は和賀川中流の錦秋湖畔にあり、錦秋湖との比高差約 25 m, 標高 250~253 m の平坦な段丘の南端部に位置する (第 6 図 12)。この段丘は北上川中流域の低位段丘金ヶ崎段丘新期面に相当する小繋沢面である。掲載した 2 点の資料は報告書に出土地点の記載はなく、層位は 3 層と記す (註 2)。発掘では、近世の建物跡一棟、縄文時代の陥し穴数基と僅かな縄文土器片と石器類が出土したのみで、3 層出土資料は、この 2 点に限られる。

6 は肉厚な素材に両側縁から幅広の剥離を行い、その後幅矯正の小剥離を施し、両側縁を平行させる。刃部は刃先方向からの剥離で仕上げ、断面は片刃状を呈する。基部はやや丸味を帯びながら突出するよう調整剥離が成される。長さ 13.9 cm, 幅 4.2 cm。

7 は横長剥片 (?) の素材面を大きく残し、片面のみ幅広の剥離を施して厚さを減じ、周辺に細かな剥離を加えて整形する。刃部は主に片面の剥離によって直刃とする。基部は尖頭器状に鋭い先端を作り出す。長さ 13.1 cm, 幅 4.7 cm。

8・9は秋田県境に接する湯田町越中畑V遺跡出土資料(伊東1994)。ここは、錦秋湖に注ぐ鬼ヶ瀬川支流の越中畑川上流沿いの中位段丘である越中畑段丘面から山麓斜面にかけて広がる(第6図15)。標高は290mを前後する。調査では昭和初期の木炭窯のほか、縄文中期と思われる土器片少量と石器類が出土しているのみで、8は調査区北東の山麓斜面からの単独出土、9は調査区南西部からの出土、両者とも報告書には出土層位の記載はない。

8は頁岩製。長さ12.9cm、幅4.4cm。両側縁から幅広の剥離により厚さを減じ、その後の調整剥離で側縁を直線的に矯正する。刃部は刃先方向からの剥離で整え、平面形は直刃となる。断面は緩い片刃と表現できよう。基部には礫面が僅かに残り、そのため丸味を帯びる。

9は片面に礫面を大きく残す厚手の剥片を素材としたもの。厚さを減じる剥離が施されるが、側縁矯正の剥離は粗い。刃部はやや丸味を帯びるよう刃先方向から両面へ最終段階に剥離調整される。断面は片刃となる。基部は三角状に調整されるが、鋭角的ではない。長さ13.3cm、幅5.9cm。

10は、1983年頃、湯田町野々宿IV遺跡(第6図16)で採集された。珪質頁岩製。現在、湯田町歴史民俗資料館の収蔵資料(熊谷2002)。発見時に因るのだろうか下端が一部剥離し、正面左側縁部を中心に新しいガジリ痕がつく、裏面には褐鉄線条痕が付着する。主要剥離面は裏面上部の大きな剥離面で、横長剥片を素材にしたことがわかる。幅広の押圧剥離が両側縁から深く入り込み、その後両先端を中心に整形の剥離が行われ、全体的に半月形に近い形をとる。

このほか湯田町大台野遺跡(第6図14)でも、Id文化層から木葉形尖頭器が出土している(菊池ほか1982)。

さて、鈴木氏が『北上市史』を執筆した時点には「北上川中流流域において断片的に発見されているもの(石斧)はすべて打製で、持川のものに近い形態をとるものがほとんど」であった。第7図には、その後発見・確認された持川遺跡出土石器群に近接する時期の石斧類を掲げ

た。

11は、湯田町峠山牧場I遺跡A地区出土資料(第6図10)。長さ26.6cm、幅9.1cm、重量1.32kgをはかる。緑色凝灰岩製で、細石刃文化層の上位から単独で出土した。両面に礫面を残し、基部方向に両面に入念な剥離が施され、側縁部も幅矯正の剥離がなされる。刃部は主に片面から剥離を施す、そのため断面は片刃となる。刃部付近に磨痕が見られる(高橋1999)。

峠山牧場I遺跡は、和賀川の南岸に発達した広大な段丘上に位置し、本資料は中位段丘である大荒沢面からの出土品である。

12は、湯田町湯之沢II遺跡から昭和40年代に採集された資料で、湯田町歴史民俗資料館の所蔵。ここは和賀川に注ぐ湯之沢川の東岸にあたるが、確実な出土地点は不詳である(第6図11)。全長25.5cm、最大幅10.65cm、最大厚4.95cm、重量は約1.5kgをはかる。石材はホルンフェルスあるいは安山岩と思われるが、風化が著しいため断定できない。

最大幅が刃部付近にあり、緩やかに内湾しながら丸味を帯びた基部へと続く。全体の形状は撥形を呈する。中央部が最も厚く、その断面は山形状になる。両面とも側縁からの剥離がなされるが、正面は稜線が中軸ラインに沿うように走り、裏面は比較的平坦になる。幅矯正の小剥離も施される。刃部は蛤刃状になり、断面は緩い片刃の形状をとる。刃部は明確な剥離の稜線が確認できず、研磨された可能性が高い。刃部両端に小さなガジリ痕がある。さらに両面に斜行・交叉する数本の線状痕が見られるが、ある程度風化しており、発見時に付いたようなキズではない(熊谷2004)。

このほか、和賀川流域では秋田自動車道建設に伴い20ヶ所以上の発掘がなされているが、持川遺跡に近似した石器の確実な例は少ない。ただ、縄文遺跡から出土している「石筥」には、形態上類似しているものがあり、見逃している可能性は棄てきれない。

6. 「神子柴型石斧」の研究

持川遺跡の石器群は旧石器時代終末から縄文時代草創期のいわゆる「神子柴・長者久保文化」に関わる資料として位置づけられてきた。

長野県神子柴遺跡(1958年)、青森県長者久保遺跡(1962~64年)の発掘で出土した特異な石斧や石槍は、その直後から多くの研究者の注目・考究するところとなった。旧石器時代から縄文時代という変遷・変化は、土器出現や文化系統伝播だけでなく、当時あっては年代観そして時代区分という方法論・歴史認識の問題とも関係していた。

このような中で、森嶋稔氏は長野県唐沢B遺跡の発掘資料に基づき、「神子柴型石斧」の編年を行い、六期に区分した(森嶋1970)。この論文では、旧石器時代から縄文時代草創期に至る石斧を一系統と捉え、幅広→幅狭、大形→小形化という基本的な流れを示し、神子柴→長者久保という編年観を提示している。

1979年、岡本東三氏は全国の関連石斧を集成、神子柴・長者久保文化とそれに後続する有舌尖頭器文化に区分し、神子柴・長者久保文化の変遷を長者久保→神子柴・鳴鹿山麓と捉えた(岡本1979)。

岡本論文には、鈴木・鎌田論文の持川・夏油温泉遺跡などの実測図が掲載されている。このうち持川遺跡資料に関して、「基部が圭頭状となる扁平な短冊形の打製石斧」とし片刃で平鑿刃をとるII型に分類した。ただし、II型を細分したa~dのいずれに当たるかは述べられておらず、「やや特殊な形態」であり、「北上市周辺に多い」と指摘している。また、秋田県鷹巣町綴子遺跡や神子柴・長野県宮ノ入・同県横倉・福井県鳴鹿山麓などと共に、デポと考えられる埋納遺跡としても紹介している。

岡本氏の編年案中には直接、持川遺跡資料の位置付けは成されていないが、北海道モサナル遺跡の編年位置から神子柴・長者久保文化の新しい段階に想定されていたと思われる。

持川遺跡資料を、編年表の中で具体的に位置付けたのは中東耕志氏である(中東1985)。中東

氏は、当該期の石斧を長者久保類型と神子柴類型に区分し、形態分類と系列変遷を示された。

それによれば、持川・夏油温泉資料は神子柴類型に属し、唐沢B・神子柴の平面形態が草鞋状、横断面三角形の片刃石斧から次第に厚さを減じていく過程と評価し、先土器時代終末期(第IIb期)から縄文時代草創期初頭(第IIIb期)の編年位置を与えた(註3)。ただ、持川資料などは、薄身で両側縁の細かな調整剝離などから、神子柴類型の主要な系列とは相違する旨も述べられている。

ついで1988年、栗島義明氏は「神子柴文化」を石槍・石斧そして彫器などの組成から、[長者久保段階→神子柴段階]と大別し、前者を[長者久保→大平山元I→後野A]に、後者を[唐沢B→神子柴]という二階梯に細分した。持川遺跡は編年表で、神子柴段階の唐沢B階梯に位置づけられている(栗島1988)。

根拠はやや複雑である。氏は、まず彫器と両側縁に調整加工された搔器、石斧最大幅位置の相違、さらに神子柴に石槍に相通じた形態の小形石斧が存在することなどから、唐沢B階梯を古く置く。そして埼玉県中道遺跡出土資料の石斧がレンズ状の断面、基部を三角形に調整することなど、唐沢B・神子柴に合致しない点を認めながらも、小形石斧の存在などから新しい神子柴階梯と捉える。この中道遺跡に類似した石斧を持つ福島県飯舘村大坂遺跡資料を同時期とし、大坂遺跡資料と比較して刃部が撥形に開かず平行した両側縁をとる持川・夏油温泉資料を古く見て、唐沢B階梯併行とするのである。

栗島氏は、さらに持川遺跡など「神子柴文化」期のデポが石斧・石槍に限定されること、しかも石斧の断面形状が台形・レンズ状を示すことから「神子柴文化」後半の神子柴段階に石斧埋納主体で現れ、その後石槍・有舌尖頭器を加えていったとする。このデポに関して栗島氏は、1990年にも論文を上梓し、そのなかでも持川遺跡を取り上げている(栗島1990)。

1992年に白石浩之氏は旧石器時代終末から縄文時代初頭にとどまらず、縄文時代草創期中葉の隆線文・爪形文土器段階までの様相を辿る

ことにより石斧の系譜を探ろうとした（白石 1992）。

まず、石斧の素材・断面・加工・研磨・石材・形態の六項目の属性に基づき、型式を弁別した。この中で、持川遺跡資料は、身が細く両側縁が並行する大形の石斧を主とする第 I 類に該当し、それを細分して「基部が尖り、刃部が直刃のもの」からなる Ia 類の典型例として位置づけ、持川タイプと呼称した。類例は少ないものの北海道モサナル・新潟県小瀬が沢・神奈川県慶應義塾大学藤沢校地内のほか、九州の出土資料や宮城県鍛冶屋敷遺跡資料などを列挙している。また、夏油温泉遺跡の小形の石斧類を第 IIa 類型として扱った（註 4）。

白石氏は、持川・宮ノ入・神子柴の三タイプからなる I 類と、ずんぐりして基部が尖り、器体上半部に肩を持ち、刃部が直刃のもの（IIc 類・中道タイプ）と基部が円基で刃部幅が広い撥形のもの（II d 類・大平山元 I タイプ）それに基部が尖基で刃部が曲刃のもの（II e 類・上野 2 タイプ）と基部が平基で、刃部が僅かに曲刃を呈し、器体中位の側縁に緩やかな挟り込みをもつもの（II g 類・川木谷タイプ）が旧石器時代終末から出現し縄文時代草創期中葉まで継続する可能性を指摘する。旧石器時代終末期に出現した石斧は多様な形態から構成されていたとし、持川タイプはその段階から成立していたとするのである。

さらに 1998 年に刊行された唐沢 B 遺跡の報告書で堤隆氏は、神子柴系石器群の登場をもって縄文草創期とする立場のもと、(削片系細石刃) → 神子柴系石斧 + 尖頭器 + 石刃 + 石刃搔器を伴う段階（神子柴・唐沢 B・長者久保）→ 石刃技法なし + ややラフな石斧と尖頭器 + 隆起線文以前の土器（寺尾 I・月見野上野 II・勝坂・多摩ニュータウン No. 796）→ 柳葉状尖頭器 + 植刃 + 有茎尖頭器 + 隆起線文土器という流れを示した（堤 1998）。

森嶋氏が指摘した、神子柴型石斧の「狭長化」や形態のくずれも追認できるとする一方で、「地域や集団を異にした石器群の個性」として神子柴・唐沢 B・長者久保の様相の違いを同一段階

に包括しようとするのである。このような把握は、石斧の同時期多タイプ構成を指摘する白石氏の見解に通じ、神子柴型石斧が一元的な変遷や一系統に収斂するものでないことを確認する点で評価できる。

7. 和賀川流域出土資料群の変遷

改めて、持川遺跡・夏油温泉遺跡など和賀川流域の石器群を、白石・堤両氏の変遷案にそって考えてみる。両氏の包括的な説に準拠するのは、これまで紹介してきた資料の大半が採集資料で、また発掘資料でも出土状態の情報が貧弱なことなどに因るからである（註 5）。

まず、持川遺跡の石器群は、前述のように基部を圭頭状にする A 類、丸味を帯びる B 類の二者で構成されている。このうち B 類は平面形から比較する限り、唐沢 B 遺跡の打製石斧（唐沢 B 報文資料 No. 29-32）に類似する。ただサイズ的には持川例は唐沢 B に比べ小振りで、厚さもなく、重量も 160~420 g ほど軽い。ただ、持川遺跡の 6 は、持川にあっては比較的厚手であることは無視できない。よって、持川遺跡の石器群を唐沢 B と同じ段階に位置づけておく。

夏油温泉遺跡では、有舌尖頭器、無茎石鏃状の石器、搔器なども出土したという。第 7 図 1 は、持川例と比較して小さく、基部の形状も異なる。類例として、第 7 図 8 の越中畑 V 遺跡例などがあげられようが、他の遺跡から見出すことは難しい。有舌尖頭器など夏油温泉遺跡の石器組成からすれば、持川遺跡より新しく縄文草創期中葉段階前後に位置づけるべきだろうか。また、夏油温泉遺跡の性格も持川遺跡とは相違するといえよう。

第 7 図 5 の大形石槍を出土した新平遺跡では、これまでのところ石斧は発見されず、石槍だけが確認されている。木葉形の形態などから、これらを一応持川遺跡と同時期と考えたい。

第 7 図 6 の上野々遺跡例は、形態的には持川 A 類に近似する。同遺跡 7 は基部先端の入念な調整剝離からは石槍と、刃部を直刃状に仕上げることに着目するなら石斧的といえる。このよ

うな石斧とも石槍ともとれるような資料は神子柴遺跡・長者久保遺跡にある小形石斧との関係も考えられる。ここでは、持川遺跡に近い段階に位置づけておく。

稲葉 I 遺跡例(第7図4)は難しい。形態は持川 A 類といえる。石斧とは思えない幅広で薄い素材の選択、剝離も押圧剝離の可能性があることなどから、持川例よりは新しく位置づけられるのだろう。

野々宿 IV 遺跡例(第7図10)は、両面加工石器の範疇として考えておく。類似例は、本遺跡から西に約 10 km の秋田県山内村岩瀬遺跡(利部・谷地 1996)などがあげられよう。

また、峠山牧場 I 遺跡の石斧は、単独出土であるが層位的には細石刃文化層の上部で、同遺跡で確認されている細身の柳葉状尖頭器のブロックとの関連からすれば縄文草創期の遺物として捉えるべきだろう。「神子柴型石斧」とは形態や石材が異なる。両面に礫面を残す点は、北部北上山地の葛巻町泥這遺跡(米地ほか 1988)や江刺市大名野遺跡の局部磨製石斧(熊谷 1985)に類似する(註6)。

湯之沢 II 遺跡の石斧(第7図12)の形態は青森県大平山元 I 遺跡(岩本・三宅 1979)の局部磨製石斧に類似する。

冒頭述べたように、盛岡市新町遺跡第 19 次調査で確認された爪形文文化層には石鏃の存在はうかがえるものの、持川例に類するような石斧は確認できず、有舌尖頭器も同様である(千田ほか 1986)。大新町遺跡から北西へ約 4 km の滝沢村室小路 15 遺跡では、斜位や横位表出の爪形文土器と薄手無文平底土器が出土しているが、長さ 6.6 cm 扁平な円礫を素材とし側縁に剝離調整を加えた小形の刃部磨製石斧が 1 点あるだけで、やはり大形の打製石斧・尖頭器類は見当たらない(桐生 1999)。

さらに、これらに後続するであろう平底無文土器を出土した花巻市上台 I 遺跡(酒井 2002)や岩泉町龍泉新洞遺跡(菊池ほか 1971)でも同様で、このことから、爪形文土器以前に、持川・夏油温泉のような石器群の系譜は終焉を迎えたと考えられる。

さて、鈴木孝志氏は持川遺跡の石器群を地域的なものと想定した。確かに、『北上市史』に掲載された水沢市胆沢城跡付近出土あるいは一関市山田遺跡資料(遠藤 1978)(註7)など類似例はいくつか確認できる。だが、遠く神奈川県藤沢市慶應義塾大学藤沢校地 II 区の打製石斧のように、形態的に類似する例は北上川中流域以外の各地に散見でき、持川遺跡例が地域的に限定される資料と捉えることはできない。

8. おわりに

「持川遺跡の石器は石斧なのだろうか?」と思うようになって数年が過ぎた。今回、これらの石器を見直すなかで、顕著な使用痕が見当たらないこと、従来「デポ」と考えられてきた特異な出土状態が、低位段丘面とはいえまさに湿地的な地形の中で僅かに砂層が形成されたような地点であることなどを改めて確認できた。

たとえば安斎正人氏は、これら神子柴石器群の石斧に関し、『威信財』あるいは『交換財』という視点を示された(安斎 1990・1999)。

また、栗島氏はデポが石槍と石斧から構成されること指摘し、さらにデポに関して精力的な研究を進められている田中英二氏も神子柴遺跡の分析の中で石斧と尖頭器が対峙するような関係にあること、インパクトの強い石器が集合していると述べる(田中 2001)。石斧も石槍もその社会にとって象徴的なものだったとするのである。

特に栗島氏は、神子柴遺跡の「小形の石斧は調整加工技術と相俟って平面及び断面形態が槍先形尖頭器に酷似しているにも拘わらず、その刃部には研磨が施され、弧状の平面形態を呈している。言わばこれをもって石斧、槍先形尖頭器という器種単位に分化した技術の重複性とその流動的關係の一端をしることができると記す(栗島 1988)。石斧と石槍(大形尖頭器)の相互干渉・越境を示唆する表現である。

これまでも神子柴型石器群の打製石斧と石槍との製作技法の共通性は指摘されてきたが、安斎氏の威信財という観点に立てば、象徴性が価

値の決定基準であって、石斧・石槍という石器機能はデポとして埋納する際、副次的な選択基準であったとも考えられる。

持川遺跡の石器は、そのような視点で表現するなら、石槍と見まがうような圭頭状の端部をもつ A 類と、石斧のスタンダードな形態である丸い基部を有する B 類の二者が組合わさって一箇所に埋納されることに意義があったのかも知れない。

改めて「持川遺跡の石器は石斧なのか？」槍であれ斧であれ具体的な機能を越えた象徴性の分析は、その河川流域など低地の空間に対する分析などと共に重要な課題となってきたといえよう。

【追記】 今回、胆沢城跡出土資料など実測・確認できなかった資料がある。また、北上川上流域や北上山地内でも類似する資料がある。県内出土資料については改めて紹介する機会を持ちたい。また拙文を草するにあたり下記の方々からご指導ご教示いただいた。記して感謝する次第である（五十音順・敬称略）。

小田島恭二・小田島知世・小原多吉・小原リス・菊池強一・高木 晃・高橋竜也・高橋文明・中川重紀・新妻伸也

【註】

- (1) 鈴木・鎌田論文の第 9 図 1 の打製石斧は、『北上市史』写真図版の夏油温泉遺跡出土資料にはなく、別遺跡の資料と思われる。
- (2) 上野々遺跡は、調査区全面にわたって水田造成工事による削平を受けていた。本資料の出土層位 3 層を同遺跡基本層序の III 層と理解した。III 層は II 層のにぶい黄橙色土の下位に層厚約 3 cm 前後に堆積するしまりの強い明赤褐色の砂質粘土層である。
- (3) 中東論文の「土器出現期の石斧類型」図版では B-II2 とした神子柴遺跡の石斧の系統に夏油 (B-II4) → 持川 (B-III4) と図示され、年代変遷をとるとしているが、夏油温泉遺跡資料と図示された資料は持川遺跡資料 (本稿第 4 図 6) である。ただ、この類型変遷図の意図は厚さを減じるという組列を示したものであろうし、その動きは首肯できる。
- (4) 註 3 の中東論文と同様に、第 4 図 6 の持川遺跡資料を夏油温泉遺跡出土資料と誤解し、Ic 類に位置づけている。このことはむしろ Ia 類と Ic 類が共存する根拠になるが、両者の共存は白石氏自身が論文中で神子柴遺跡で確認できると述べている。
- (5) 両氏の変遷案は三期に区分する点は共通するものの、神子柴系石器群を旧石器時代終末に位置づける白石氏と縄文時代草創期とする堤氏のように、評価は異なる。ただ、三段階目について白石氏は縄文草創期中葉を「隆線土器段階」とし、堤氏は「一部に隆起線土器をもつ様相が見られる」と述べており、基本的には同じ時期を指していると思われる。
- (6) 峠山牧場 I 遺跡や大名野遺跡のような大形の局部磨製石斧は、それ以前のナイフ形石器に伴うような石斧とは大きさが明らかに異なり、その系統的關係を求めることはできない。
- (7) この資料は、鈴木・鎌田 1971 論文の第 2 図に掲載されている資料である。

【引用・参考文献】

- 浅田知世 1993 「北上市新平遺跡出土の尖頭器」『岩手考古学』5, pp. 37-39. 岩手考古学会
- 安齋正人 1990 「V 唯物史観と旧石器時代 4 ナイフ形石器文化の時代」『無文字社会の考古学』p. 180-216. 六興出版
- 安齋正人 1999 「狩猟採集民の象徴的空間；神子柴遺跡とその石器群」『長野県考古学会誌』89, pp. 1-20. 長野県考古学会
- 伊東 格 1994 『越中畑 IV・越中畑 V 発掘調査報告書』(財) 岩手県文化振興事業団埋文センター (同事業団埋蔵文化財調査報告書 201)
- 岩本義雄・三宅徹也 1979 『大平山元 I 遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館 (同館調査報告 5)
- 遠藤輝夫 1978 「第二章 原始時代」『一関市史』第一巻 (通史) p. 283-457. 一関市
- 岡本東三 1979 「神子柴・長者久保文化」『奈良国立文化財研究所研究論集』V, pp. 1-57. 奈良国立文化財研究所
- 小田島恭二ほか 1991 『和賀町内遺跡分布調査報告書 III (藤根・長沼・後藤地区)』和賀町教育委員会 (和賀町文化財調査報告書 28)
- 菊池強一ほか 1971 『龍泉新洞遺跡発掘調査報告書』岩泉町教育委員会 (同町文化財調査報告 2)
- 菊池強一ほか 1982 『大台野遺跡』湯田町教育委員

- 会
- 桐生正一 1999 『室小路土地区画整理事業発掘調査報告書；室小路I・7・11・15・16遺跡』滝沢村教育委員会（同村文化財踏査報告書31）
- 栗島義明 1988 「神子柴文化をめぐる諸問題；先土器・縄文の画期をめぐる問題（一）」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』4, pp. 1-92. (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 栗島義明 1990 「デポの意義；縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』7, pp. 1-44. (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 熊谷常正 1985 「岩手県北上市周辺の旧石器について；和賀町愛宕山遺跡の石器群を中心に」『日高見国』p. 3-23. 菊池啓治郎学兄還暦記念会
- 熊谷常正 2002 『町内遺跡詳細分布調査報告書II（小繋沢・白木野・越中畑・野々宿地区）』湯田町教育委員会
- 熊谷常正 2004 『町内遺跡詳細分布調査報告書IV（川尻・湯川地区）』湯田町教育委員会
- 酒井宗孝 2002 「岩手県花巻市上台I遺跡について」『第16回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』pp. 69-74. 東北日本の旧石器文化を語る会
- 佐藤嘉広ほか 1993 『岩手県北上市和賀町愛宕山遺跡発掘調査報告書』岩手県立博物館
- 鈴木貞行 1995 『上野々遺跡発掘調査報告書』(財) 岩手県文化振興事業団（同事業団埋蔵文化財調査報告書212）
- 鈴木孝志 1968 「北上川中流域の無土器文化－北上市周辺の遺跡」『北上市史』第一巻 p. 15-30. 北上市史編纂室
- 鈴木孝志・鎌田俊昭 1971 「北上川中流域の石器－その1－」『遮光器』5, pp. 13-15. みちのく考古学研究会
- 高橋義介ほか 1999 『峠山牧場I遺跡A地区発掘調査報告書』(財) 岩手県文化振興事業団埋文センター（同事業団埋蔵文化財調査報告書291）
- 田中英二 2001 「第4章 デポ遺跡の展開」『日本先史時代におけるデポの研究』p. 107-146. 平電子印刷所（千葉大学考古学叢書1）
- 千田和文ほか 1986 『大館遺跡群（大新町遺跡・大館町遺跡）；昭和60年度発掘調査概報』盛岡市教育委員会
- 堤 隆 1998 「6 唐沢遺跡の様相」『唐沢B遺跡；後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけての移行期の石器群』p. 57-72. 千曲川水系古代文化研究所
- 中東耕志 1985 「土器出現期における局部磨製石斧の一樣相；群馬県境町神谷遺跡の石斧」『群馬県立歴史博物館紀要』6, pp. 23-50. 群馬県立歴史博物館
- 森嶋 稔 1970 「神子柴型石斧をめぐる再論」『信濃』22-10, pp. 156-172. 信濃史学会
- 米地文夫・西条 潔・菊池強一 1988 『泥這遺跡』葛巻町教育委員会（葛巻町文化財調査報告3）
- 利部 修・谷地 薫 1996 『東北自動車道秋田線発掘調査報告書XXII；岩瀬遺跡』秋田県教育委員会（秋田県文化財調査報告263）